

述べらるゝ如く、宗教の發達を、(イ)教義と、(ロ)これを説く僧職者、就中その教團と、(ハ)教化の對象でありその教團の物質的基礎でもある信者とその精神生活、の以上三つの因子が主となり従となりつゝくりひろげられる一つの歴史過程として捉え、この三因子についての考察を各時代に均霑せしめることによつて日本淨土教の成立を體系化しようと試みられたものである。この場合、氏は時代を律令時代と藤原時代と及び院政時代の三つに分けて、その一くざり一くざりの移行の過程には、これを可能とする歴史的・社會的諸條件の成熟があり、それに伴つて思想それ自身おのずから形を變えてきた事を示さんとされた。かゝる研究は先年出版された石田充之氏の日本淨土教の研究が教義・思想を主とした上部構造に關する研究であり、家永博士の日本思想史に於ける否定の論理の發達を初めとする諸論攷も上部構造に重點を置いて論述されたのに對し、かえつて堀一郎博士が、我が國民間信仰史の研究に於て示された研究方法に依り、社會的ないわゆる基礎構

造を明らかにし、その立場より上部構造へ及ぶ方向に於て、各時代の教義・思想のよりよき理解を目指して研究されている。而して、かゝる場合陥り易い佛教教義の無理解も、和辻・花山博士等のバックによつて良く咀嚼されていて、その啓蒙するところ極めて多く、今後の日本淨土教研究に、本書は重要な礎石の役割をなす貴重な研究であり、必讀の書として廣く江湖にお奨めしたい。(A5・四四九頁・一四〇〇圓 山川出版社發行)

(細川)

龍樹の淨土教思想

——十住毘婆沙論に對する

一試攷——

長谷岡一也著

この書は、龍樹造十住毘婆沙論本文の客觀的な解讀といふことを基礎にして、龍樹淨土教の綱要を勘へ、淨土の教系が大乗般若の當然一思想形態として了承せられることをインド佛教の立場から論述しようとしたものである。と、巻頭の山口先生の序にいられるが、全體の意趣は

これにつきていへよう。今は著者が特に力説せられる點を若干とりあげてみよう。

十住毘婆沙論を通じて淨土教に關係のあるところは、釋願品に於ける「淨土」に對する龍樹の解釋と易行品に展開せられる易行道の思想とであらう。その「淨土」に對する龍樹の解釋とは、詳しくは菩薩の十大願の中、第七淨土の願の解釋に於いて見られるものであり、それを著者は次の如く三項によつて理解される。

「龍樹によれば、淨土とは(イ)不淨といふこの世間的な態の空じられた境地であり、衆生と行業との二功德を體とするものである。(ロ)そして菩薩によつて淨土が建立せられる所以について、それは、「本願と因縁」による菩薩の大精進によつて建立せられる中道實踐の妙果であり、(ハ)従つて、假設有の最も純化せられたものとなる。それ故に、淨土とは大悲の活動の形成する世界であつたわけである」と。そして、著者が以上の如く龍樹の本文を理解するに際し、(イ)に於いては、衆生と行業を中論第八品に説く作

者、業に相管せしめ、その中論第八品に説かれる如き筋道に於いて理解せられ、(四)に於いては、「本願と因縁」を「本願と本願を發さしめる因としての大悲心」といふ意味に理解し、山口先生が「般若思想史」(四六頁)に於いて、龍樹に於ける淨土教思想と空般若の思想との關聯を説示せられ、龍樹に於ける淨土思想は般若空の世間的實用態が完成せられる因施設・假(prañapti)の上に設定せらるべきであるといはれてゐるそれと同じ筋道が語られてゐる。(五)淨土とは十相を具するものであるが、龍樹はそのことについて詳細な説明をあたへ、淨土に對する「假」の思想を明瞭に打ち出してゐると注意される。

次に易行品に於ける易行道の思想については、曇鸞がその淨土論註に於いて難易二道の教判を樹立したのが、この易行品の言葉によつたのであるから、この所言が極めて重要であることは申す迄もない。著者は先づ、(一)易行品に於ける難行・易行の原語の吟味に出發し、易行道の本質を論じ、つづいて(二)論註の教判と

易行品の思想的關聯を、更には(三)淨土眞宗の教義に對する易行品の思想的な意義を、次第して關説される。

先づ難行はその原語が *duskhara* (困難なこと、作し難きこと)であり、易行道は *Sukhapatipad* であり、難行・易行は全く原語の性格を異にするものといふ。易行品に於いては易行道に對して難行道が對立的にあるものでなく、修道階次の上における主體的な自覺の階次を指示するものといふ。

いきをひ、相ひ異なる難易二道があるといふ教判に對しては批判的な形で論議が進められる。そして「信を方便とする易行」と規定せられる易行道が不退轉地への方便たり得るのは能所二執の空である「信心清淨 *Citta-prasāda*」を本質とするからであると云つて易行道の本質が述べられる。かくして十住毘婆沙論に於いて、易行道が佛道であり、(1)聞名すなはち佛の御名を聞くことによつて「信心清淨」を得るならば、そこに無始以來の我執我所執としての煩惱を滅して速かに不退轉地に悟入する (2)そして不退轉地に

於いては却つて限りなき自力の有執と一切の群生海が見出され、懺悔、勸請、隨喜、廻向の行によつて限りなく易行道の本義を窮めて行くといふのが佛道である。これは難易二道と判釋されるものと少しく相違し、難行とは易行道に到る過程に於いて難行道であつたのである。淨土論註ではそのことが、難行道―自力の行が窮極に於いて捨てらるべきであり、易行道のみが畢竟成佛の道路であるといふ時機的な了解としてあらはれ、その論註

の教判が道綽、法然と相承され、親鸞聖人に到つて相對する二道としてだけでなく、紹待門として難行道は易行道への方便假門として、共に弘願一乘に入らしめんと佛の大悲として仰がれ、龍樹の闡顯する易行道が淨土門として意味を全ふしたといふ。なほ二、三の論項の注意すべきものがあるが、今は都合でそれに觸れることを割愛しよう。何れにしても般若空の中觀を學ぶ人にも、淨土教の研學に専心する人にも一讀を御奨めしたい。

(昭和三十三年一月 京都 法藏館 洋
B 6、一六六頁・二五〇頁) (荷葉)